opusdei.org

## 聖ホセマリアの生涯 -14

託された神からの使命遂行に献身するため、ホセマリア・エスクリバーは病人援護会での仕事を辞めます。このことにより師とその家族は経済的苦境に立たされます。

2023/07/06

## 過去の記事はこちらから

聖ホセマリアは1927年6月から病人 援護会の指導司祭の仕事をしていま した。ところが、1928年10月に神の 計画を知り、それ以来オプス・デイ 創立の仕事が始まりました。援護会 の膨大な仕事は大きな負担となりま す。1931年頃聖ホセマリアはこの神 の計画の実現のために神が病人援護 会の仕事を辞めるよう求めておられ ると感じました。しかし、これには 二つの不都合がありました。一つは わずかであるにしても収入源を失う こと。もう一つはマドリード司教区 に居るための資格を失うことでし た。ただ、本当に辛かったのは4年 間心を込めて働いた仕事から手を引 くことでした。子どもたちや病人や 貧しい人々に深い愛情を抱くように なっていたのです。

1931年10月、完全に病人援護会から離れました。そのとき、指導司祭を失い困っていた女子修道院のことを知り、その後任を引き受けることになりました。これはただ苦しむ人を見過ごせない優しい心のためでし

た。この仕事には報酬がなかったのです。

こうして家族の経済的問題がさらに 悪化することになります。後に神父 の母ドローレス夫人は「マドリッド は私たちにとって煉獄でした」と 言ったそうです。母は息子が断食な どの苦行をしていることにも気づい ていました。父の会社の破産以来 ずっと続いている貧しい生活に雄々 しく耐えてきたお母さんもいらいら することもありました。ある日、 「こんな生活をこれ以上続けること ができません」と言い、神父がおや つを食べないでいるのを見て「そん なことをしているから、頭が空っぽ になるのよ」と叱りました。もっと も母はこういうときもすぐに落ち着 きを取り戻すのですが。

聖ホセマリアは自分の苦しみは喜ん で耐えていましたが、家族が苦しむ のを見るのは別でした。神父は神に 家族の苦しみを取り除くよう頼んでいましたが、経済状態は悪化の一途をたどり、とうとう銀行から金を借りるまでになりました。でも神様は別の仕方で神父の祈りを聞き入れて下さいました。家族全員が貧しさの中に喜びを感じて生きるようになったのです。

息子の秘密を知らないお母さんは彼のため安定した収入のある教会内の 仕事を探していました。しかし、ホセマリアは神の使命を優先してそれ を断ります。家族の経済的問題はま だ数年続くことになりました。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-14/(2025/12/19)